

ゆりスナ！　～引きこ  
もりの少女はスナイ  
パーになります！～

ミカサ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幼げが残る一人の少女、大羽由莉（おおば ゆり）。そんな容姿とは裏腹にネットの中では60万人のプレイヤーの頂点に君臨する最強の呼び声が高い狙撃銃使いのプレイヤー『Yurri』として名を馳せていた。だが……リアルではまさかの引きこもり!?  
いつものようにゲーム内で愛銃を手に敵を次々にキルしまくっていたある日、由莉の元に一通のメールが届く。

『スナイパーになりませんか?』

この一言が由莉の運命を変える引き金になった。

由莉の類稀なる狙撃の才能はみるみるうちに開花していく。だが、そんな由莉に待つ

ていたのは……絶望だった。

それでも前に進もうとする由莉の一つの願いとは――

『わたし……本当は殺したい人がいるんです。自分の手で』

何度も何度も立ち上がる、そんな一人の少女の苦しみと幸せを描いた今までにない成長物語、ここに始まる！

評価や感想、アドバイスもくだされば至極の極みでございます！

# 目次

プロローグ

# N/A 大羽由莉はスナイパーです

! | 1

# 001 由莉は最強のプレイヤーで

した | 12

# 002 由莉は引きこもりから卒業

するみたいです | 19

由莉は初めて外に出ました | 29

## プロローグ

### #N/A 大羽由莉はスナイパーです!

「ふう……このビル高くない……うまあ、いつか。さて、準備しなくちゃ」

ある日の昼、夕方頃に爆破撤去をするという廃ビルの屋上に来た少女——大羽おおば由莉ゆりは女子高生らしい少し短めなブレザーに赤のリボン、スカートに上からコートという服装でいた。屋上からの風が由莉の束ねた少し暗めの茶色の髪をたなびかせる。

屋上の端の方まで行くと羽織っていたコートを脱いで持ってきた楽器ケースの蓋をパカッと開けた。そこには綺麗な楽器……ではなく黒光りする何かの部品がいくつかあった。

由莉がそれを手っ取り早く組み立てるとそこには——アンチマテリアルライフル対物狙撃銃バレットM82 A1A1があった。

バレットM82 A1

全長144cm。重量12.9kg。

使用弾は12.7×99mm NATO弾

俗に言う50口径弾のその大きさは12.7cm。弾の半径は1.3cm。

命中すれば血は霧となり、肉はミンチよりもぐつちやぐちやになる。四肢に当たればその部位は綺麗に吹き飛び、胴体に当たれば体が弾ける。まさに破壊の申し子と言いうべきだろう。

その銃の威力は1.5km離れた人の上半身と下半身が真つ二つになったとの逸話もある。

そんな由莉の身長と同じほどの大きさがある銃をビルの端に敷いたシートに乗せ、そこにバイポットを展開させて伏射姿勢になった。

「よろしくね」

そう呟きながら由莉はバレットM82A1の銃身をまるでわが子のように撫でた。この子は私の大切な相棒……今も、『あの頃』もずっと――

由莉はそのまま銃の動作の確認を始めた。力いっぱいコッキングレバーを引いて離す。チークパッドに頬をぶにやっつくつつけながらスコープを覗き、引き金に指をか

け、そのまま人差し指の第二関節を曲げる。もちろん、動作の確認だけだから弾は入っていないが。

ガチリ

もう一度、同じことを繰り返して動作の不具合が無いことを確かめた。

「うん、いい調子っ」

今日もいつも通りの愛銃に思わず笑みがこぼれた。そして、由莉は箱の中から鈍く金色に光り由莉の手の大きささほどもある50口径弾を3つ弾倉に押し込み本体にセットした。そのままコッキングレバーを思いつきり引いてM82A1の銃弾のを込めた。ひと通りの準備が終わったタイミングでマスターから連絡が来て、もう一度依頼の確認をした。

「今回のターゲットは華夜組の組長だ。」

「すごい大物ですよね……なんか緊張しちやいます」

マスターの声がスマホ越しに聞こえてくる。確かに、何度もこの仕事やってきたけどニューースにも出るくらいの人なんて初めてだよ……

「由莉なら余裕なのだろう？」

「もちろんです！」

由莉がいるのは狙撃地点から1.5 km離れた廃ビルの屋上である。普通この距離の狙撃はプロでも困難を極める。しかし、由莉はこの距離くらいなら余裕で狙撃が出来る。スナイパーになろうと思った『あの日』からずっと鍛錬してきたんだから。

「そうか、期待しているぞ」

「はいっ、頑張ります！」



マスターが期待してくれている……頑張らなくちゃ!

由莉は撃つための準備は整えたが、狙撃の時間までは1時間以上あった。今日はいにく一人での仕事だったから暇だなあ……と思いつつもその間、静かにその銃を構え続け、標的を一撃で葬るためにひたすらに集中力を高めた。

時間の5分前になると由莉はそのケースの中にあつたイヤーマフを頭につけた。これを付けている間は外部の音が一切聞こえなくなる。それは無防備な状態を敵に晒すことに他ならない。だから由莉はそのギリギリまで付けないようにしている。すると、風が強くなったのを感じた由莉は風速計で風速と角度をもう一度調べた。

(あれ? 角度70、風速5m……ね。少し風が強くなってきちゃったな)

由莉はスマホに入れていたソフトで計算し、スコープのノブをカリカリッと調節する。このノブの調節も少しでも狂うと絶対に当たらない。が、そこはずっとこの仕事を

してきた由莉には問題ではなかった。

——もうそろそろで時間だ……頑張ろつと

### 狙撃時刻1分前

男は予定通りの場所に行こうと車で向かっていた。

「これが終われば俺の天下だ。もう権力も財産も全部だ！」

そう笑いながらその男——華夜組の組長は車で目的地に向かっていた。この取引さえ終わればこの国の裏側を全部取り仕切ることが出来るほどの権力と財産が手に入る。汚いよだれが思わずこぼれ、運転手と共に下劣な笑いを零していた。

自分の頭部がスコープのレクテイルの中心にある事も知らずに——

由莉はターゲットの乗った車が見えると、そつとイヤーマフを耳に付ける。スコープの倍率を上げ、男を視界に捉えた。

「助手席に乗るなんてほんつと不注意なんだから……まあ、今から狙撃されるなんて分からないよね。」

由莉はもうこの場で狙撃してしまいたかったがマスターの指令は「車を出た時」と言われていたから、ぐつと堪えて待ち続けた。

由莉は人差し指をくいと曲げ引き金を引くような動作を繰り返し、もうすぐ来るその瞬間のために万全を尽くしていた。目標を確実に撃ち殺す為に。

……人を撃つことに躊躇いはある。そこまで、私は機械みたいにはなれないよ。けど……それは罪も何もない人だけ。悪いことをしている人を撃つと言われれば……私は躊躇なく引き金を引くよ。敵に同情するほど……私は甘くなんてない。敵に隙を見ればそれだけたくさんのものを失う事になる……大切な物を失うなんて、そんなの……絶対に嫌だから。そんな思いをするくらいならこの子で……私の……マスターの敵を……撃ち殺す。

「……………来たっ」

目標ポイントに來ると車はその場で停止した。由莉は一度深呼吸するとスコープを覗きながら男が出てくるのを待った。

(車から降りてきた瞬間に……………撃っ！)

由莉は人差し指で引き金をギリギリまで絞り少しの力だけで撃てるようにした。今から粉微塵になるなんて夢にも思ってもいない男は車の扉をゆっくり開けた。

「っ!!」

由莉はもう一度深呼吸してから肺にある空気も全部吐き出すかのように吐くと、男がひよこつとドアの上から顔を出しレクテイルの中心に重なった瞬間——引き金を一気に引き絞った。

この子の銃弾いのちの咆哮が鳴り響いた。

激しいマズルフラッシュが網膜を突き刺し、衝撃が由莉の小さい身体を通して全て床に吸収される。放たれた50口径弾は秒速836m、音速の2倍以上の速度で1.5kmの空間を切り裂いた。

銃弾は金色の放物線を空に描きながら飛翔。由莉の狙い通り弾はこめかみから侵入すると頭の中にある生暖かく柔らかい脳みそが一気に圧迫され、その衝撃に頭蓋骨が耐えきれなくなった瞬間、

パーン、と頭部が弾けるように吹き飛んだ。

頭蓋骨は粉々に砕け散り、脳みそはぐつちやぐちやになり、脳漿と共に辺りにぶちまけられた。頭部に残っていた大量の血を広範囲に撒き散らし、頭部を失った首からは真つ赤な噴水が吹き出て暫くの間、赤色の雨がその場に降り注いだ。

男のあまりにも呆気なくて酷い最期となった。

それを確認したのとほぼ同時にバレットから排出された薬莖がクルクルと回りながら地面に落ちカラカラカラと小気味のいい金属音を奏でた。

(あとは……あの運転手にも……当てる)

男の頭が吹き飛んだのを確認すると、そのまま主の突然の爆殺に車の中で慌てふためく運転手の胸に狙いを定め容赦なくバレットをぶっぱなした。車が防弾ガラスなのは知っている。けど、

———この子の前でそんな玩具おもちゃなんて意味ない。そんな薄っぺらいガラスに負けるほどの子は……弱くない。

弾は防弾ガラスをやすやすと突き破るとそのまま胸に向かって50口径弾が飛び込み———文字通り上半身が『爆ぜた』。黒で整えられた車内が一気に真っ赤に染まり、運転席にはその男の腹から下の下半身だけが残されていた。

ターゲット  
標的2人を『人』から『ただのタンパク質の塊』と化するのにかかった時間は由莉が第一射を撃つてから――僅かに8秒。

「よしっ、依頼完了っつと。」

由莉は素早く使った後の薬莖を集めてポケットにしまい、バレットを急いで分解、ケースに収納すると何事も無かったようにビルを出ていった。

「えへへっ、今回も上手く狙撃出来た♪マスター褒めてくれると嬉しいな〜」

これは、そんな一人の少女がスナイパーになる決意と覚悟をした時から始まる物語。

# #001 由莉は最強のプレイヤーでした

## 都市伝説

その言葉を聞くと様々なことが思い浮かぶ人が多いと思う。バミュー○トライアン  
グルや、エリ○51の謎、宇宙人、フリーメイ○ン……

それらは対象への知識が不足し、本来ならあり得ない事象が事実として語り継がれて  
都市伝説となった——そんなケースが多い。

また、誰もが信じたくないものが噂となつて広まり、それが尾びれ背びれを付けて肥  
大化した結果、都市伝説となることも少なからずある。

そして、これから話すのは後者によつて生まれたゲーマー界では知る人ぞ知る、そん  
な星の数あるなかの1つの都市伝説だ。

「ゲームであまりにも強すぎるプレイヤーは何時しかそのゲームに二度とログインしな  
くなり闇の組織や殺し屋、政府などに目をつけられ本物の殺し屋やスナイパーとして活  
動している」



「馬鹿げた話だ」「そんなことある訳ない」と大抵のプレイヤーはその戯けた噂のような都市伝説を切り捨てた。

しかし、一部のプレイヤー達は寄って集ってそれを信じていた。なぜだろうか？

その理由の鍵を知るには少しだけ時を遡るとしよう。

この時、あるFPSゲームで一時期全プレイヤー最強とまで言われた狙撃銃使いのプレイヤーがいた。そのプレイヤーは可愛い少女のアバターであったが、その実力は常人のそれではなかったと言う。

曰く、死角なし

曰く、近づこうとした瞬間即殺

曰く、超遠距離狙撃も朝飯前

曰く、1戦闘で20キル以上0デスが常識

曰く、  
——最強

発売されて2年。1試合30分、キル数とデス数の換算で順位が決まるそのゲームは

多くのゲーマーが魅了された。

そして、そのプレイヤーの戦績は――

21, 192戦 489, 535キル 394デス キルレ:23

1位獲得率 99.5%

キルレランキング 1位/615, 957人

プレイ数 1位/615, 957人

最長狙撃距離ランキング 1位/615, 957人

連続キル数 1位/615, 957人

こんなのを見ればチーターだと疑うのも当然であり人はこぞってそのプレイヤーを調べた。しかし、分かったのはプレイヤー名が「Yuri」ということと――――――生身の人間が実際に操作してるといふ事実。チート行為を働けばすぐBANされるこのゲームでされないと言うことは……真正正銘の力に他ならなかった。

嘘だ。

信じられない。

そんな言葉が連日、掲示板に上がりサイトニュースに上がったのもあって一部のネット界限では話題のプレイヤーであった。そして多くの人々がそのプレイヤー「Yuri」に興味を持ちメッセージを送信した。……しかし、「Yuri」は一言も発さず、交流の一切を絶っていた事もあり謎は深まるばかりであった。

だが、そのプレイヤーはある日を境にぽつきりとログインしてこなくなった。ただ、一度だけほぼ1年後にログインしたという形跡があるだけで――

と、これがそのプレイヤーに戦闘とすら言えない蹂躪を味わわされたほぼ全員がその都市伝説ともいえる噂を信じて疑わなかった理由である。

それじゃあ、そろそろ話そう。これが一つの都市伝説を誕生させた当時、60万人以上のプレイヤーの頂点に君臨していた「Yuri」の素顔、そしてこの『少女』の紡ぐ物語を――

数年前

「みんな、隠れるの下手すぎるよお〜はい、ヘッドショットつと」

そのプレイヤーの正体はまだ幼げが残っていて、髪の毛は少し暗めな茶色でいわゆるセミロング、瞳は澄んだ琥珀色の少女、大羽おおほ由莉ゆりだった。

そして、学校には行けてない……………いや、行くことが出来ない引きこもりだった。

そして由莉の趣味はFPSと銃と女子の趣味としたらあまり考えにくいものだ。

そんなある日、今日も今日で多くのプレイヤーが由莉の餌食になっていった。

「も〜…………もう少ししつかりと隠れないと丸見えだよ…………つと危ない危ない」

スコープの中にいる人を次々に撃ち殺すだけ。あまりに簡単な作業で由莉は少々退屈な日々を送っていた。けど、スピーカーから聞こえてくる愛銃の銃声…………運営曰く本物の銃声らしいが、それを聞くのだけは飽きないし、何より快感であった。自分の人差し指一つで銃声が響き敵が木っ端微塵になることがたまらなかった。

「えへへっ、今回も私の勝ち〜♪26キル……うん、いい調子！この子本当にすごいなあ」

由莉の主武装は対物狙撃銃バレットM82A1。由莉がこのゲームを始めて少しの頃に偶然手に入れた代物で恐らく、このゲームのサーバーにもそう何本もあるものではない。由莉はその銃を初めて見た時、胸がトクンとした。一目惚れだった。この銃でたくさん人を……殺したい、そんな狂氣的思考に駆られるくらいこの子に魅了された。そんな相棒に向かって手を触れようとしたけど、液晶パネルで阻まれたからあえなく断念した。あつ、分かってたよ？

「ふう、楽しいなあ……ほんとに……凄く楽しい………」

黙り込んだ空間にパソコンの起動音が断続的に響く。その畳3帖あるかないかの小さな部屋の中だけが……青く光るコンピューターの画面2つだけが……由莉のたった一つの居場所だった。

つまらないと思った事なんて一度もないよ？

だつて……ここだけが私の居場所なんだから……ここ以外、

私には何もないから

---

## #002 由莉は引きこもりから卒業するみたいです

「いつか……この銃、本当に撃つてみたいなあ……でも、そんな事、外国じゃないと出来ないし……ううん、考えるのやめよつと……うっ、また背中の傷が……っ」

背中の痛みに由莉は顔を顰《しか》めながらマウスを素早く動かし、リザルト画面を矢印マークが疾走してようやくホーム画面まで戻ってくると由莉は思いつきり背伸びをするそのまま床に寝そべった。

「うーん、今日はもう寝よつかな……久しぶりの2徹だから少し疲れちゃった、ふわああ……」

新しいランキングイベントが始まって3日、由莉は負けるものかと初日に2時間ほど仮眠をとってから、2・3日目とぶつ通しでプレイしていた。その結果、

1 1 2 戦 3 0 2 4 キル 3 デス

ランキング1位	560, 560 pt	「Yuri」
2位	243, 000 pt	「Clive」

文句の「く」の字すら言わせず、完膚なきまでに、ぶっちぎりの1位を突っ走っていた。

隔月で行われるランキング戦は今月で第13回である。そして各ランキング戦の1位だったプレイヤーは

第1回 Granvelle

第2回 Yuri

第3回 Yuri

第4回 Yuri

第5回 Yuri

第6回 Yuri



第7回 Yuri

第8回 Yuri

第9回 Yuri

第10回 Yuri

第11回 Yuri

第12回 Yuri

初回こそベテランプレイヤーに押しつぶされてしまったが、第2回以降はYuriが11連覇中である。というのも、由莉は始まって5日くらいで2位以下を最低でも倍400,000点以上は平気ではなしてしまうのだから誰もがやる気を喪失してしまっている。

「起きたらまた頑張ろう……ね………ん？」

気を抜いた瞬間に溜まっていた疲労が一気に溢れ、そのまま床で意識が微睡《まどろ》み、まさに夢の世界へと足を踏み入れようとしていたその時、「ピロンっ」とメールが届く音が目を閉じていた由莉の耳に聞こえた。

「ん……？誰からだろう……私のメールアドレス知ってる人なんてあまりいないはずなのに……珍しいな」

眠たい目を擦ってパソコンのメール欄を確認すると一通だけメールが届いていた

（誰からだろう……？メールのさし宛もない……）

由莉はウイルスメールじゃないかと疑いつつも恐る恐るメールの中身をチェックするとそこにはただ一つ、URLが貼られていた。

「ネットに繋がるリンクじゃない……？直接リンク……だったかな……？」

そういわれるリンクは注意しろとネットにも書かれていたから由莉は凄く迷った。

（怪しいなあ……すつごく怪しい。どつかの詐欺サイトとかと繋がったら面倒なことになっちゃうからなあ……でも……見なきゃいけない気がする。なんでかは分からない

けど……うん、開いちゃおう……！)

覚悟を決め、少し手を震わせながらサイトを開くと次の瞬間、ページ先へと飛ばされるとそこには問題がはられていた。

「狙撃に関する問題……う……ふふつ、少しは楽しめそうかな」

内容はかなり難解なものだったが由莉は問題を見るなりこれくらいの問題ならと迷うことなく、答え続けていった。

——数分後

簡単すぎるよ……弾道計算？スナイパーの動き？なんだか馬鹿にされてるような気がする……こんなの誰だって分かるよ……？

もちろん、普通の人なら絶対に分かるわけない知識問題と高校応用レベルの計算問題が次々と飛び交ってきたが、由莉は凄まじい速度で文字を打ち込み答え続けた。何十問解いたのだろうか……もう分からなかったが由莉はとにかく無心に解きまくっていた。

するとある問題を解いた瞬間、再び別のサイトに飛ばされた。そこに書かれていたのは……

(狙撃……？本物の？たしかに興味はある……ない訳がないよ！けど……さすがに冗談だよね……あはは……)

流石に由莉も苦笑いを隠せなかった。何を冗談いつてるの？そんなこと出来るわけない、そう思っていた。

しかし、そのサイトに書かれている事に由莉は段々と惹き込まれていった。書いてあることはただ一つ。

「スナイパーになつてみませんか？」

たった一言、それだけなのに……なんでこんなに胸がうずうずするんだろう……。胡散臭いけど……本当に出来るのなら……やりたい。嘘だつたらここまで手の込む事なんてしないよね。多分……

とりあえず返信しよう、そう思った由莉はパソコンのキーに指が触れる直前、身体が謎の反射を起こしピタッと止まった。その指先も少しだけ震えていた。

「……………」

外に出るのが怖かった。怖くて仕方がなかった。もし、お母さんに見つかったら次は……絶対に……

殺される

PCの前でただ俯く事しか出来なかった。どうするのが正しいのか分からなかった。何年もこんな生活をしてきたのに、今さら……………

けど……行かなくちゃいけない。なんとなくそんな気がする。行かなかつたら……きつと私が後悔する。

不思議な何かに突き動かされた由莉は意を決してそのサイトに返信を送った。すると数分後には返信が届き、2週間後の週末に目的の場所へ来るように言われた。幸い、

ランキングイベントが終わった次の日だったから少し安心すると一気に気が抜けそのまま意識は夢の中へと吸い込まれていった。

——そして、2週間後

「うんっ、今回もよゆーの1位♪」

### 最終結果

1位 Yuri 2,410,400 pt  
 2位 Clive 1,044,900 pt

・  
 ・  
 ・

由莉は誰一人寄せ付けることなく圧倒的な差で1位となり12連覇。

これはサービス終了まで、この優勝回数は誰一人破ることは叶わず当然、連覇記録も破られることなく、伝説のプレイヤーの名を欲しいままにしたというのは何年もあとの

話だ。

「うん、これでもう満足だよ……さて、準備しなくちゃ」

そして、次の日。由莉は自分の服や電子マネーなど必要最低限のものだけ持つて扉の前に立った。なんとか自分の赤いリュックと肩にかけるポシエツトの中に収めることが出来たがパソコンやゲームのパッケージを入れることは叶わなかった。

もう、ここには戻ってこれないかもしれない……あのゲームともお別れ……かな。2年もプレイしたんだから別れるのは辛いよ……。……けど、不思議と後悔はないんだよね。あの子とはまた絶対会える、そんな気がする。

由莉はドアノブをゆっくりと回し、数年来の陽の光を浴びた。あまりの眩しさに、うつ……と手で目の上をかざす。眩しい……。なんか肌もジリジリする……。まだ、4月だからそんな季節じゃないと思ってたのに……

しばらくして、目も慣れてくると部屋の外へと出るとガチャツと扉が閉まる音がした。

そこで由莉は自分の住んでいた所がアパートみたいな所の1階だったことを初めて知った。少しボロくて……ほかの部屋の窓は蜘蛛の巣とか埃を被っているし……私以外誰も住んでいなさそう……。

そのアパートの隅っこに刺さっている茶黒く錆び付いたスコップも少し気掛かりだったが由莉にはそれ以上気にする余裕がなかった。

よし、行こう。今度は見つかりませんように……そう願いながら由莉は逃げるように背中に担いだリュックと肩にかけてあるポシエットを揺らしながら日中を駆けていった



## 由莉は初めて外に出ました

地図で調べた記憶を頼りに走ったり歩いたりすること20分。

まだ暖かい4月だったから由莉は何とか駅まで体力を保つことが出来た。駅と言っても東京駅とかそのクラスで大きいものではなかったがそれでも休日なのもあって人もそこそこ集まっていた。

「ここが……駅……?……大丈夫。ネットで調べた駅より小さいし人も少ないから……」

ここでお母さんと会ったらどうしよう、と少し足が竦《すく》みそうになったが由莉は気持ちを押し殺して駅の中に入った。いった。

由莉は、まず駅の広さに目を疑った。遙か先に見える壁やだだっ広い通路、そして赤や黄色、青などに染められた数々の看板。ずっと狭く暗い空間にいた由莉にはあまりにも広すぎて——綺麗だった。

「すごい……こんなに広いんだ……私の部屋なんか本当に豆粒くらいしか  
なかったんだ。」

「これが、外なんだ……こんなにきれいなんだ……！さつきまで必死に走つてた  
から気にする余裕がなかったけど……すごいよ、本当に……っ。」

由莉は感極まつて少し泣きそうになったが、こんな所で泣いて怪しまれるのは嫌だと  
思つてグツと堪えると辺りをキョロキョロと見回して券売機を探した。

券売機が案外近い所にあつたことに安心した由莉は電子マネーを使つてササツと  
80円の片道券を買つた。

由莉はホツと胸をなでおろしたが次が由莉にとっての難関だつた。

### 自動改札

通勤ラッシュの時は流れるように通らないと周りの迷惑になつてしまふ、電車をよく  
使う人にはお馴染みのあれだ。

由莉はその横で他の人の人の邪魔にならないようにびくびくしていた。あそこにこの券  
を入れればいいんだよね……？でも、なんだかそのまま手もあそこに引きずり込まれそ  
うだから怖い……！あつ、電車もう来ちゃう……！どうしよう……落ち着け、私……っ。

大丈夫、こんなの頭を狙い撃つより簡単。誰だつてできることだから……っ！

由莉は意を決すると自動改札の列に並んだ。ほかの人は何事もないうに通つていくからすぐに由莉の番がやってきた。あまりの緊張で手足はカチコチになつてロボツトみたいにくクシヤクシヤ歩きながら自動改札の前まで来た。

吸い込まれたらすぐに手を離す、吸い込まれたらすぐに手を離す……大丈夫、行ける……っ

由莉は震えながらも券を入れる場所にそれを入れた。シユンっ！と勢いよく券が吸い込まれていき、由莉もビクツと全身、鳥肌が立った。

(こゝ、怖かったあ……)

由莉はそのまま券を取りつつ自動改札を通りホームへ向かうと丁度止まっている電車があつたから急いで乗ると乗つたと同時に出発のアナウンスが聞こえてドアが閉まつた。あと数分遅れていたら危なかつたと由莉は心底ヒヤヒヤした。

あいにくと座る場所がなくて、つり革にも手が届きそうになくて少しシヨックを受けつつも仕方ないと由莉はドア際の銀色の棒に掴まつて行くことにした。

そのまま15分、由莉は初めて経験する揺れに心地良さを覚えつつも指定の駅に着くと電車を降りた。さつきまでいた駅とは違って、凄く田舎にありそうな雰囲気のある無人駅だった。どこまでも田んぼが広がっているその光景に由莉は壮大さを感じていた。田んぼつてこんなに広いんだ……写真で見ただけじゃ分からないんだなあ……、と思っていると遠くからバスがやってくる音が聞こえてきた。乗り遅れると大変だからと大急ぎでバス停の前に着いたのとバスが止まったのはほぼ同時だった。由莉はそのまま乗り込んで、再び揺れる車内の旅を続けた。

45分後

(や、山だ……)

由莉が降り立ったのはもはや田んぼでもなく完全に山の近くだった。由莉はこんなところに家があるのか少し心配になったがああメールを信じよう、と決めていたからそのまま自分の頭の中の地図を必死に辿っていった。

——さらに1時間後

由莉は休憩を挟みつつ自分の体力を考えながらゆつくりとしたペースで歩いていた。約束の時間まで残り30分だがギリギリ間に合いそうであった。

(何があるんだろう……怖いし、不安だけど、凄くドキドキするよ……!)